

社会福祉法人旭川荘理事長

末光 茂さん(75)



すえみつ・しげる 松山市生まれ。岡山大学医学部を卒業し、児童精神科医として旭川児童院に勤務。1988年に院長となり、2007年から現職。川崎医療福祉大特任教授、日本重症心身障害学会副会長のほか、中国の上海市第二社会福利院・名誉院長などを務める。

# 取材力発揮 問題を提起

1956年の旭川荘創設の頃から「障害者福祉」の在り方を世に問い続けてきたのが山陽新聞でした。中でも、重症心身障害児に焦点を当てた連載企画「社会の片すみ」(65年8月〜66年4月、84回)は画期的でした。当時、社会から「隠された存在」だった重症心身障害児に医療・福祉のケアが届いて



## 心に残った記事

連載企画「社会の片すみ」に心身障害者に愛の手を」は、重症心身障害児を日の当たる場所へ導いたといえます。連載に登場した養育に悩む保護者が「わが子が山陽新聞で紹介され、社会のお役に立てたことが誇らしい」と話していたことが印象に残っています。

いない実態や、養育する保護者が周囲の支えを得られずに悩む姿をあぶり出しました。連載を機に旭川荘には各方面から浄財が寄せられ、67年には「旭川児童院」という中四国初となる重症心身障害児施設の開設を果たしました。荘創設に参画した故江草彦名誉理事長の「1人の100万円もありがたい。だが、同じ100万円でも

100万人が1円ずつに込めた思いは貴い」という言葉を覚えています。金額の多寡ではなく、関心の広がりや意味を見いだしたのでしょうか。旭川荘には毎年約1万人のボランティアが訪れます。その潮流を生んだこの連載は日本新聞協会賞を受賞されました。社会を動かす「新聞の力」を感じました。

その後も障害者が地域で暮らす「ノーマライゼーション」の理念、知的障害者の雇用による社会参加といった時々の話題を報じ「福祉県・岡山」の土壌を耕し続けてきています。

近年、医療・福祉の高度化が図られてきた一方、障害者の高齢化や手厚い支援が欠かせない「医療的ケア児」への対応が問われるようになってきました。倉敷市内に端を発した就労継続支援A型事業所での大量解雇問題が各地で相次ぎ表面化しているほか、発達障害のある人と社会がどう向き合っても大きな課題です。

地に足を着けた山陽新聞ならではの「取材力」を発揮し、郷土から社会全体へと問題を提起する報道を今後も期待します。

(聞き手・平田桂三)